

マーシャルの経済学生成過程に関する一考察

—限界効用理論と限界生産力説について— (1)

坂 口 正 志

I 序

アルフレッド・マーシャルの経済学体系形成過程を解明しようとする際の主要な困難は、彼の考えの着想と公表との間にしばしば大きな時間的ずれがある⁽¹⁾上に、着想の時期を客観的に証明しようとするような初期の資料が乏しいことにある。そのために、マーシャルがかなり後になってからいろいろな人物にあてた手紙の文中等で述べられている彼自身の主張に多くを依拠しなければならず、着想の時期と発展過程とを客観的な証拠に立って解明することが極めて困難であった。

たとえば、一般にマーシャルは、ジェボンズ、メンガー、ワルラスの3人とは独立に、ほぼ同時期に、というよりもマーシャル自身の主張によれば、ジェボンズの *The Theory of Political Economy* の公刊(1871年10月)以前に、限界効用理論に到達していたと言われており、大多数の学者はこのことには特に異議を唱えてはおらず、一応これが定説になっている。しかしこれに関する客

(1) ケインズは次のように述べている。「マーシャルの経済学の発展を説明するという仕事は、最初の発見や口頭による弟子達へのその伝達と、書物による外部世界への最終的公表との間に、いつも長い時間的隔りがあるために困難になっている。」J. M. Keynes, "Alfred Marshall, 1842~1924," A. C. Pigou ed., *Memorials of Alfred Marshall*, 1925, p. 13. なお、本稿において、欧文諸文献からの引用等に際しては、邦訳のあるものについてはそれを参考にしたが、必ずしもそれに従ってはいないので、いちいち邦訳文献は明記しなかった。

観的な証拠はこれまで（少なくともウィタカーの編著⁽²⁾公刊まで）ほとんど全くあがっていない。マーシャル自身の後年の主張⁽³⁾や、ケインズ⁽⁴⁾、ショープ⁽⁵⁾を初めとする弟子達の証言や推測が根拠となつて、確たる証拠もないままに、一応定説として受け入れられてきたにすぎないように思われる。

マーシャル自身の主張や弟子達の証言・推測が全面的に信頼できそうであれば問題はないが、マーシャル自身の記憶ちがいか書きまちがといった事情があるのか、事実合致しないと思われる点があったり、マーシャルや弟子達の主張・証言がどういう意味で言われているのかあいまいであったり、弟子達の推測の根拠があいまいであったりして、これまでの諸学者の研究では、若干の不可解な疑惑が提出⁽⁶⁾されている。その最も極端なものがハウエイ⁽⁷⁾で、マーシャルが独立に限界効用理論に到達したということ自体に疑問を投げかけ、端的に言って、それはマーシャルとその弟子達が捏造した虚構だと言うに等しい解釈を行っている。

マーシャルの弟子達の証言や推測自体がマーシャルの後年の主張に根拠を置くことも少なくなっただけに、上述のような状況の中では彼自身の主張の信憑性や正確さが重大問題であり、特に初期の資料の発掘・公表が待望されてい

(2) J. K. Whitaker ed., *The Early Economic Writings of Alfred Marshall, 1867-1890*, 2 Vols., 1975. 以下、本書は *EEW*. と略す。

(3) 最もはっきりと主張されているのは、Marshall's letter to L. Walras dated 1 Nov. 1883, W. Jaffé ed., *The Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, 3 Vols., 1965, Vol. 1, Letter No. 595, p. 794, である（後述脚注⁸⁰参照）。他に、ケインズが根拠としている、A. Marshall, *Principles of Economics*, 3rd ed., 1895, Preface to the first edition, p. xiv, xivn; III, vi, §3, p. 205n をも参照。

(4) Cf. J. M. Keynes, *op. cit.*, *Memorials*, pp. 21-22, 22n.

(5) Cf. G. F. Shove, "The Place of Marshall's *Principles* in the Development of Economic Theory," *Economic Journal*, Vol. 52, Dec. 1942, pp. 294ff.

(6) その若干のものは以下の文中で提出・紹介されるが、他にたとえば、早坂忠、「マーシャルとワルラスとの関係についての一覚書」『（東大）社会科学紀要』1966年，pp. 1-19.

(7) Cf. R. S. Howey, *The Rise of Marginal Utility School 1870-1889*, 1960, pp. 76ff.

た。このような中で1975年秋に *EEW* が刊行され、マーシャルの初期未公表草稿が公表された。これによって初期の資料不足という空白はかなり埋められたが、なおかつ未解決の問題もあれば、逆に、新たに疑問の生じてきた問題もある。

こういった問題の1つに、マーシャルの限界生産力説の生成発展過程の解明という問題がある。彼は1900年7月2日付のクラーク宛の手紙で次のように言っている。

「私が“正常賃金”=“terminal”（私は“marginal”をフォン・チューネンの *Grenze* から得た）productivity of labour という学説を定式化したのは、フォン・チューネンを読む以前であったかどうか思い出せない。少なくとも部分的にはそうだったと思う。なぜなら私の経済学との接触はミルを読むことで始まったが、その間もなおケンブリッジで数学を教えることによって生計をたてながら、彼の学説を可能な限り微分方程式に翻訳し、可能でないものは原則として排除していたからである。その基盤に立って私は〔ミルの『原理』の〕第2編にある賃金基金説の趣きをもった賃金学説を斥け、彼の第4編の賃金学説を受け入れた。その第4編では、彼はリカードの方法という最良の伝統に従っているようであり（私は何もリカードの positive doctrine of wages を弁護して言うのではない）、従って私が後にフォン・チューネンの立場であると知ったものに極めて近いと私には思われた。それは主として1867～8年のことであった。私がクールノーを読んだのは1868年だったように思う。その時フォン・チューネンは読んでいなかったと記憶している。それを読んだのは恐らく1869年か70年である。というのはドイツ語を十分には知らなかったからである。⁽⁸⁾」

(8) *Memorials*, pp. 412~13. 傍点は原文イタリック、□内は引用者の補足。また1898年1月7日付のキャナン宛の手紙では次のように言っている。「その頃〔1869年〕私は国民分配分の学説、即ち、それが土地、労働、及び資本の分け前に分けられる仕方は、一方における生産費（ないし不効用）と、他方における効用との微分係数の均等性によって支配されるという学説を採用した（その時、私はこれらの用語を用いなかったが）。」 *Ibid.*, p. 405. □内は引用者の補足。

この主張も全く確証が得られないままで現在に至っているものであるが、これが事実であるとすれば、彼が経済学研究を開始したのは1867年というのが一応の定説であるから、彼はそれからわずか2年ほどで限界生産力説を定式化したことになる。また、若干の先駆者とチューネンを除けば、限界生産力説の確立に貢献した他の学者達に比べても定式化の時期はかなり早いことになる。⁽⁹⁾しかもそれはリカード、ミルからヒントを得ていることになる。そうであれば、また新たな問題も生じてくる。このような早い時期のことであるから、それが限界生産力説と云うるようなものであるのか。「少なくとも部分的には」定式化していたというのはどのような意味でどの程度のものか。リカード、ミルからの影響とチューネンからの影響とはどのような関係にあるのか。それから約20年後の *Principles* に至るまでの彼の限界生産力説の展開過程はどういうものか。こういった問題である。

本稿において筆者が主として関心を持っているのはマーシャルの初期の限界生産力説の生成・展開過程の考察であり、特に、前掲の手紙に見られる彼の主張の信憑性を検討することによって、1870年頃の彼の限界生産力説の生成状況をさぐることを目的としている。しかしこの問題は限界概念を含んでいる性格

(9) ジェボンズが1871年公開の主著で利子の限界生産力説的説明を行っているのは周知のことであるが、後の版においてもそれは不完全である上に、賃金が結局は残余であるかのように扱われており、それ故、彼が限界生産力説の一般的定式化を行ったとは考えにくい (cf. W. S. Jevons, *The Theory of Political Economy*, 4th ed., 1911, pp. 245~47, 270). ワルラスは、ジャッフエによれば、1877年に同僚の数学者アマシュタインの助けを借りて限界生産力説に近付きながらそれを展開できなかつたようである。(W. Jaffé, "New Light on an Old Quarrel," *Cahiers Vilfredo Pareto*, Vol. 3, 1964, 丸山徹訳, 「古い論争の新しい解明」, 安井琢磨・福岡正夫編訳, 『ワルラス経済学の誕生』昭和52年, pp. 133ff. 筆者はジャッフエの原論文にあたることができなかつたが、アマシュタインの手紙と、それに関するジャッフエのコメントが W. Jaffé ed., *The Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, Vol. 1, Letter No. 364, pp. 516~20 にある)。ウィクスティードの有名な *Co-ordination of the Laws of Distribution* が現われたのは、ようやく1894年である。

上、彼の限界効用理論の生成状況をも考察することが必要不可欠であり、またそれ自体としても興味深い問題である。そこで、限界生産力説の検討に先立って、まず初期の彼の限界効用理論を考察して、ハウエイの見解を問題提起として筆者の見解を示しつつ、彼の限界効用理論の生成過程の一端をながめてみたい。

Ⅱ 限界効用理論の生成・展開

ハウエイは1872年から1890年までのマーシャルの著述を検討して、マーシャルが独立に限界効用概念に到達したということに強い疑問を投げている。それを要約すれば次のようになる⁽¹⁰⁾。

「1890年に至るまでのマーシャルの全著作において、彼が効用に触れたのはジェボンズの *Theory* の書評、*Economics of Industry*、及び *Pure Theory of Domestic Values* の3回だけ」で、「これらのどの場合にも彼は効用という考えを、それに彼が生みの親らしい関心を持っていると読者に思わせるような仕方では勿論、その考えを高く評価していると思わせるような仕方さえも使用しなかった」(p. 85)。1872年のジェボンズ書評(“Mr. Jevons’ *Theory of Political Economy*”) で彼は限界効用の問題を「いかなる商品の総効用も『その最終効用度』に比例しないというのは周知の真理である⁽¹¹⁾」と述べて、「彼が限界効用について以前から知っているのだと読者に信じさせようとしたのだ」(p. 84)。1876年の“Mr. Mill’s *Theory of Value*” で彼はジェボンズに2度言及しているが、効用という用語 (term) は用いていな

(10) これに対する批判的検討が次の2つにあり、次節の論述において筆者はこの2つから多くの示唆を得ているので参照されたい。早坂忠、「マーシャル経済学形成過程についての若干の覚書——彼のジェボンズ『経済学理論』評との関連で——」、『(東京大学) 社会科学紀要』1970・1971年, pp. 115ff. 橋本昭一、「マーシャルと『限界革命』」、『(関西大学) 経済論集』第27巻第1号, 昭和52年4月, pp. 39ff.

(11) 以下の要約の中のページ数はハウエイの前掲書のページである。

(12) *Memorials*, p. 95.

⁽¹²⁾ い (cf. p. 76)。1879年の *Pure Theory* では、価値の検討を需要・供給曲線の導入によって始めており、効用概念を導入するのは消費者地帯を説明する段になってからである (cf. pp. 76~77)。同年の *The Economics of Industry* では価値に関連して効用概念を用いてはいるが、2次的・付随的な使用に止まっており、彼は1879年まで限界効用概念を価値論に取り入れていなかった (cf. p. 77)。彼が次に限界効用に言及するのは、1881年の “The Review of Edgeworth’s *Mathematical Psychics*” であるが、エッジワースの主要な結論がジェボンズに類似しているにもかかわらず、ジェボンズの場合とは反対にマーシャルがエッジワースに好意的な態度を取るのには、そこに介在する10年の年月の間に効用概念を経済分析に用いることに近親感が増したためである (cf. pp. 79~80)。1885年の “The Present Position of Economics” ではジェボンズの名を3度あげているが特に効用とは結びつけておらず、彼は効用という用語を用いないで現経済学の現状を論評した (cf. p. 80)。それ故に、「明らかに1885年のマーシャルは70年代初めの3人組の出現が経済学を変革したという考えを全く抱いていなかった。1885年から1890年までの年月の間に、彼は効用という考えを入念に磨きあげ、それを彼の経済分析論理に更にしっかりと結びつけることを真剣に始めたにちがいない」(p. 80)。よって、「1889年〔原文のまま〕以後に至るまで、マーシャルが限界効用にわずかな

(13) これに対して早坂氏は、ジェボンズへの言及が正確には3回で、しかもハウエイが見落した個所には次のように最終効用という用語が用いられていることを指摘している。「ジェボンズ教授が『最終効用』について述べていることの多くは、少なくともインブリットにはミルの説明の中に含まれていると私は思う。しかし彼は、この考えと関連している多くの決定的な諸点を卓越した明確さでもって明らかにし、それによって経済学に対する最近の貢献のうちで最も重要なものの一つをなしたげたのである」(*Memorials*, p. 128n)。ハウエイのあげている2か所はジェボンズの名前だけ、ないし名前と書名だけの簡単なものであるだけに、ハウエイの見落しは重大であると、橋本氏と共に言わざるを得ない。Cf. 早坂忠, *op. cit.*, p. 124; 橋本昭一, *op. cit.*, pp. 51n~52n.

注意しか払わなかったというあらゆる証拠を見れば、思想史家達が時にマーシャルをその概念の独立の発見者の中にあげるのはどうしてか」(pp. 80～81)。それはマーシャル自身が印刷物中で公然とそれを暗示し続けた上に(尤も、彼は暗示する以上のことはしなかったが)、ケインズも、一部はフォクスウェルから得た示唆もあって、1871年以前にマーシャルが限界効用概念を使用していたとはっきりと言明はしなかったものの、そういう印象を植えつけようとしたせいであり、更にショーブがそれを強化・定着させたせいである (cf. pp. 81ff)。

これに対して早坂氏の見解を⁶⁴抜萃して示してみる。

「ハウエイのマーシャル論難の多くは根拠薄弱な、むしろ邪推にすら近い」(p. 125)のものであって、「マーシャルが独立に限界効用概念に到達したことは……ほとんど疑問の余地はない」(p. 128)。ただ、「ジェボンズが個人の限界効用……から出発し、それを礎石にして、彼の全体系を構築しようとしたのに対して、マーシャルは……集計的ないし社会的なそれから出発し、そこから個人の問題を考えるというジェボンズとはかなり異なった接近方法でそれに近づいていった蓋然性が強く、……限界効用概念に付与する重要度がジェボンズとは異なっていた、ということは言えそうである」(pp. 164～65)。マーシャルは「交換価値論の基礎理論として効用論を考え……たのではなく、彼の理論の大部分の出発点は市場の需給曲線(関数)であり、効用論は、それらの展開の過程で着目された厚生論的問題との関連でやや付随的に導入されたのだ」(p. 176)と考えられる。即ち「厚生論的考察のために……効用理論が導入され」(p. 177)なのだ。

かくして両者の最大の対立点は、1871年10月以前のマーシャルに限界効用概念があるかどうかという問題に還元される。更に、もしあるとすれば、それがどのように用いられているかも問題になる。両者の論著が共に *EEW* 公刊以

(64) 以下の抜萃のページ数は早坂忠氏の前掲論文のページである。

前のものであるだけに、両者の見解を肯定するにせよ否定するにせよ *EEW* に収録の「初期論稿」⁶⁹を検討しなければならない。またそれとは別に、筆者の主たる問題意識からも、その検討が不可欠である。更に、両者の見解を総合してみると、厚生論的考察のために導入された限界効用概念の取扱い方が *The Economics of Industry* あたりから徐々に変化しているらしいから、この点についても若干の考察をする必要がある。

*The Pure Theory of Domestic Values*⁶⁹には、ある際立った特徴がある。本書は第1章で国内価値論を扱い、第2章で租税負担と消費者地代を扱っている

(15) ここで言う「初期論稿」とは、マーシャルが1873年頃までに執筆したもので、価値論、貨幣論、賃金論、利潤論、資本論、地代論、外国貿易論から成っているが、本稿で言及するのは主として最初の3つである。この3つの執筆年代はジェボンズの著書公刊以前の1870年か1871年、最も可能性のあるのは1870年であるとウィタカーは推定している。また、これら、特に賃金論には、チューネンの影響が見られないから、チューネンの考えを知る以前に執筆されたもので、従ってまた、マーシャルがチューネン流のアプローチに転換するのは1870年か71年と考えるのが可能性が高いとウィタカーは推定している。Cf. *EEW.*, Vol. 1, pp. 119~21, 178.

(16) 本書は *The Pure Theory of Foreign Trade* と共にシジウィックによって私的に印刷・配布されたもので、*The Theory of Foreign Trade* なる書物（これは結局公刊を断念している）の一部をなすものである。従って本書の執筆年代の確定は困難だが、本書を含む *The Theory of Foreign Trade* は、マーシャルの後年の手紙によれば、1873年か74年から執筆を始め、1877年6月に一部を除いてほぼ完成したらしい。それより先に1876年か1877年初めにほぼ完成した草稿を *The Economics of Industry* の草稿と共に、公刊の意図をもってマクミラン社に送っていることがマクミランの返書によって確認できる。なおケインズは2つの *Pure Theory* については1873年頃にはほぼ完成したと推測しているが、ハウエイはケインズの推測の根拠がないという理由等で否定的である。Cf. Marshall's letter to E. R. A. Seligman dated 23 April 1900, *EEW.*, Vol. 2, pp. 3~4; Marshall's letter to H. Cunynghame dated 7 April 1904, *Memorials*, pp. 448~50; A. Macmillan's letter to Marshall dated 17 April 1877, *EEW.*, Vol. 1, pp. 59~60; J. M. Keynes, *op. cit.*, *Memorials*, p. 23; R. S. Howey, *op. cit.*, p. 76n4 (pp. 235~36). 同じく *EEW.*, Vol. 1, pp. 58, 81, 81n; Vol. 2, pp. 3~7 をも参照。なお本書は *EEW.*, Vol. 2 に収録されている。

が、第1章には効用概念が全くない。需要曲線の基礎として効用概念を用いるという考え方が全くなく、直ちに自明のもののように右下りの市場の需要曲線を描いている。効用概念は第2章でのみ、消費者地代の測定のために用いられているのである。この顕著な特徴が早坂氏をして、マーシャルの効用論が交換価値の基礎論としてではなく厚生論との関連で付随的に導入されたという解釈を強く示唆しているという見解を提出せしめたのであり、この見解は少なくとも本書を見る限りではかなりの説得力をもっている。また、ハウエイや早坂氏が指摘するもう一つの特徴は、マーシャルが消費者地代の分析を進める際に、主として満足や使用価値という用語を用いており、効用という用語は総効用及び最終効用という形で2回だけジェボンズの名と結びつけて、それも全く付随的に用いていることである⁽¹⁷⁾。このことは彼が効用という用語を積極的に使用するというよりもジェボンズの用語としてのみ用いようとしていることを示しているように思われる。

しかし、同じ年に出版された *The Economics of Industry*⁽¹⁸⁾ では状況が少しちがう。本書では第2編第1章「定義、需要法則」の第4節で「使用価値ないし効用」と「交換価値」を定義した後、第6節で「効用と価値との関係、最終効

(17) Cf. *EEW.*, Vol. 2, p. 214; R. S. Howey, *op. cit.*, pp. 76~77; 早坂忠, *op. cit.*, p. 179n2.

(18) 以下本書は *EI.* と略し、引用は特に断らない限り1879年版, 1881年版, 1889年版共に字句及び該当ページが全く同じである。本書はもともとマーシャル夫人が初学者向に執筆し始めたもので、婚約(1876年5月)後、マーシャルが手伝うようになり、1876年から77年初めにはほぼ完成したらく、前述のように草稿をマクミラン社に送っている。しかしその後出版までにかなり大幅な手直しを行っているらしいので、マーシャルが執筆した時期は1876年~79年の間としか言えない。Cf. J. M. Keynes, "Mary Paley Marshall," *Essays in Biography, The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. 10, 1972, p. 239; The draft of Marshall's letter to W. Jack of Macmillan and Co., *EEW.*, Vol. 1, pp. 61~63; 早坂忠, 「マーシャルの一日本人翻訳者あて書簡をめぐって——最近のマーシャル研究の動向にも関説しつつ——」, 『思想』1977年3月号 pp. 136~39.

用」が論じられ、第7節で「需要法則」⁽⁴⁹⁾が論じられている。第6～7節あわせて2ページたらずにすぎないが、そこで彼は次のように論じている。

「売手の売ろうと決めた数量が多ければ多いほど、それを売り払うことの出来る価格が低くなるというのは通常経験する事柄である。……これらの事実は、ある物のある人に対する効用、即ち、その物が彼の欲望を満足させる力が、一部は彼の既に保有している同種の物の数量にどのように依存しているかを示している。それを保有している量が多ければ多いほど、その物を更に多量に保有すれば、彼に対するその物の効用は低くなる。……彼がフランネルを1ヤードにつき1シリングで手に入れることができ、彼はその価格で20ヤード買うとすれば、このことは21ヤード目の彼に対する効用が、その1シリングを他の方面に費すことによって得られる満足よりも小さいということを表わしている。換言すれば、1シリングは彼が買う最後の1ヤードである20ヤード目の効用をちょうど測定する。ジェボンズ氏の happy phrase を用いれば、フランネル1ヤードの彼に対する最終効用は1シリングで測られる」(EI, pp. 69~70. 傍点は原文イタリック)。

「それ故、需要法則は：ある与えられた時間に市場で買手を見出す商品量は販売に供される価格に依存し、需要量は価格の低下によって増加し、価格の上昇によって減少するように変化する。その価格は各買手に対するその商品の最終効用、即ち、その商品のうち、ちょうど彼が買うに値する部分の彼に対する使用価値を測る」(EI, p. 71)。

ここでも彼は最終効用をジェボンズの用語として用いてはいるが、それに止まらずに彼は効用ないし最終効用という用語を、もっと積極的に使用する姿勢を見せているように思われる。この点で EI は *Pure Theory* と少々ちがってきている。満足や使用価値という用語も用いられているが、同時に、効用という

(49) 以上のこの段落の引用は、EI の目次 (1879年版, p. ix; 1881及び1889年版, p. xi) ならびに p. 68から。

用語が多用されるようになって⁽²⁰⁾いるし、機械の最終効用という用語⁽²¹⁾も用いられているのである。また効用概念の用い方も、*Pure Theory* とはちがって本書では、極めて簡単でかつあいまいではあるが、需要と効用とを結びつけようとしているように思われる。それは前掲の章タイトルや節目次にも表われている。また効用逓減も極めて簡単ながら述べられている。たしかに極大化行動による価格と限界効用との比例性については、ジャッフェが指摘しているように非常にあいまいであるが、この比例性をマーシャルが知らなかったわけではない。恐らく前掲の第1の引用文後半がこの比例性をも含意しているのであろう。彼はこれを、多言を要しない自明のことと考えていたらしいふしさえある。*Principles* ではこの比例性は明確に述べられてはいるものの、数行で片付けられているのである⁽²²⁾。*Principles* の初版ではその直後に節を改めて更に23行ほどこれについて論じているが、その脚注で彼は「ゴッセン、ジェボンズ、及びその他の学者達はこの種の偉大なる多くの命題 (propositions) を証明するために極大極小の数学理論を用いてきた。しかしそれらは恐らくわかりきったことであつて、入念な証明を必要としない」と述べているのである。*Principles* におけ

(20) *EI* の第2編第1章以外に、たとえば pp. 93, 122, 142, 148 などを参照。効用という用語は「初期価値論」において1度だけ使用されているが (cf. *EEW*, Vol. 1, p. 125), アダム・スミスの用語としてであつて、彼は使用価値という用語を用いている。ジェボンズ書評の中で用いている効用という用語は、その性格上、ジェボンズの用語として用いていると解すれば、マーシャルは最終という用語は勿論、効用という用語も直接的にはジェボンズから得たと考えてよからう。

(21) Cf. *EI*, p. 122.

(22) 後述の脚注(23)を参照。

(23) Cf. A. Marshall, *Principles of Economics*, first edition, 1890, pp. 155~56; ditto, 9th (variorum) edition with annotations by C. W. Guillebaud, 2 Vols., 1961, Vol. 1, p. 95.

(24) *Principles*, first ed., p. 156. これに対応する叙述が第2版以降の III, v, §1~§2 (9th ed., Vol. 1, pp. 117~18) にあるように思うが、ギルボウは触れていないようである。Cf. *Principles*, 9th ed., Vol. 2, p. 255.

(25) *Principles*, first ed., p. 156n.

るこういった取扱いを見ると、*EI* のような小冊子では叙述を更に簡略化しているということは考えられないことではない。これらのことを考えれば、彼はここで不十分ながらも限界効用論と需要法則とを結びつけようとしていると解釈してもよいと思われる。

しかしその取扱い方は限界効用論を革命的と考えているような取扱い方には見えない。初学者向であるから叙述を簡略化したとも考えられないではないが、限界効用論を革命的と考える者であれば、初学者向であるからこそ、もう少し限界効用論についての平易な叙述があってもよさそうなものである。それ故 *EI* においても彼の叙述は効用論を重視したものでなく、付随的に効用概念を用いているにすぎないという印象を抱かせる。*EI* においては効用概念と需要法則とを結びつけようとしているとはいふものの、その結びつけ方は前掲の第1引用文に見られるように、需要法則を通常経験する経験法則として把握した後で、この事実は限界効用が逡減するというを示しているという論理になっている。需要法則から限界効用逡減を逆に説明しているのがあって、限界効用概念を基礎として、それから需要法則を導き出しているのではないのである。その点では、右下りの需要曲線を自明であるかのように考えている *Pure Theory* と変りがない。また、使用価値ないし効用を測定するという点に重点が置かれていることも同じである。

需要法則から限界効用逡減を説明するという叙述順序は *Principles* 初版にもその痕跡が残っているように思われるのであって、そこでは茶の例によって需要法則が示された後、その基礎としての限界効用に言及されている。またその個所には Marginal or Final Utility という用語法も残っている。しかし第2版以降になると限界効用から需要法則を導き出すという順序が定着し、当該個所から final の用語も姿を消している。

② Cf. *ibid.*, pp. 154~55.

③ Cf. *Principles*, 2nd ed., 1891, pp. 150~52; 9th ed., Vol. 1, pp. 93~95. この点に関する *Principles*, 初版の叙述がわずか1年後の第2版よりもむしろ *EI* に近いよう

かくして *Pure Theory* から *EI* を通って *Principles* 初版、更には第2版へと進むにつれてマーシャルは右下りの需要曲線を無条件で想定する段階から、需要法則の背後の事情をさぐり、限界効用概念から需要法則を導き出そうという方向へと徐々に変わってきているように思われる。そして、このような方向へと彼が変化し始めるのは *EI* あたりからであると考えてもよからう。

さて、マーシャルは *EI* をワルラスに贈呈しているが、その礼をかねて *Eléments d'Economie Politique Pure* の送付を知らせる手紙の中でワルラスは「交換における価値と最終効用との比例性についてのジェボンズの理論を受入れていることがわかりました」と述べている。ところがこれに対するマーシャルの返書には「私がジェボンズ氏の『最終効用』の学説を受入れたということはできません。なぜなら私は彼の書物が現われる以前に、ケンブリッジでの講義でそれを公けに教えていたからです。実際には私は別の名称『終端使用価値 (terminal value-in-use)』を用いていました。しかしクルノーの導きに従っ

に見えるのは、初版の需要論の大部分が1881年11月から1882年2月に執筆されたということにも関係があろう。Cf. J. M. Keynes, "Alfred Marshall, 1842~1924," *Memorials*, p. 39n.

② ウィタカーは、マーシャルがジェボンズ流のアプローチの持つ教育的長所を徐々に認めるようになり、1876年までに彼がジェボンズを評価するようになったと推定している (cf. *EEW.*, Vol. 1, pp. 46~47)。これはジェボンズ書評が「いくぶん冷淡な (somewhat cool)」(J. M. Keynes, *op. cit.*, *Memorials*, p. 22) あるいは「多少敵意のある (rather grudging)」(*EEW.*, Vol. 1, p. 99) ものであったのに対し、1876年の "Mr. Mill's Theory of Value" あたりからジェボンズに対する彼の態度が変わってくるからであるが、*Pure Theory* や *EI* の執筆時期から見ても1876年というのは妥当な年代のようである。なお、ジェボンズに対するマーシャルの態度の変化には、1874年末から彼等の接触が始まっていることも一部関係していると思うが、全く臆測の域を出ない (マーシャルは1877年にはブリストルの大学の学長兼教授職に応募する際ジェボンズから推薦状を得ている)。Cf. Jevons' letters to Marshall dated 7 January 1875 and 23 June 1877, R. D. C. Black ed., *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*, Vol. 4, 1977, Letter Nos. 411 and 492, pp. 95~96, 204~205; *EEW.*, Vol. 1, pp. 101~102.

て、私はジェボンズの書物の中の中心点を全て前もって知っておりましたし、多くの点で彼よりも先に進んでいたのです⁶⁹⁾と述べている。

注目すべきは、この手紙と前掲のクラーク宛の手紙とによって、マーシャルはジェボンズの書物の公刊以前に既に限界効用概念及び限界生産力概念に到達していただけでなく、実際に terminal という用語を用いて学生に教えていたらしいということである。ハウエイはこれを批判して、terminal という用語をマーシャルはどの著作においても使っておらず、ジェボンズがその著書の中で使ったものである⁶⁹⁾と言う。

これに関連するのは次の *Principles* 初版序文中の文章である。

「『限界 (marginal)』増分という用語 (term) を私はフォン・チューネンの *Der isolierte Staat* から借りた。それは現在ドイツの経済学者達によって一般に使用されている。ジェボンズの理論が現われた時、私は彼の『最終 (final)』という語 (word) を採用したが、次第に『限界』のほうがすぐれていると確信するようになった」 (*Principles*, first ed., p. xn)。

ハウエイはこの文章を、マーシャルがチューネンから「限界」という用語を借用し、次いでジェボンズの「最終」を借用し、後に再び「限界」に戻ったと解した上で、チューネンは「限界」にあたるドイツ語を使っていないと批判する⁶⁹⁾。マーシャル自身も *Principles*, 第2版における初版序文を次のように変え

69) Walras' letter to Marshall dated 28 October 1883, W. Jaffé ed., *op. cit.*, Vol. 1, Letter No. 593, p. 792. ジャッフエはこの手紙の注 (p. 793) で、マーシャルの当該個所の叙述が価格と最終効用との比例性を明確に述べているとは解釈しにくいと述べているが、ここでは、ワルラスがそう考えたというだけに止める。

69) Marshall's letter to Walras dated 1 November 1883, *ibid.*, Vol. 1, Letter No. 595, p. 794.

69) Cf. R. S. Howey, *op. cit.*, p. 85.

69) Cf. *ibid.*, p. 84. ケインズもハウエイと同様の読み方をするが、それを肯定的に見るか否定的に見るかで見解が分かれる。そしてケインズは最終という用語の使用を、マーシャルがジェボンズに敬意を表したものと考えている。Cf. J. M. Keynes, *op. cit.*, *Memorials*, p. 22n.

ている。

『限界』増分という用語はフォン・チューネンの思考方法と調和し、私は彼から示唆を受けた。尤も彼はその用語を実際には使っていないが。……〔初版ではこの脚注は、限界増分の概念 (idea) は勿論、用語 (phrase) もフォン・チューネンを踏襲したものだと誤って受取られる内容であった〕
(*Principles*, 2nd ed., p. xivn. [] 内はマーシャルのもの)。

早坂氏はハウエイの解釈を批判して、マーシャルの *Principles* の初版序文の脚注はハウエイの言うような読み方しかできないというものではないと言う。たしかにマーシャルの文章だけを見れば、彼がチューネンを読んで「限界」という用語を思いついたが、その後ジェボンズの「最終」を借用し、後に再び「限界」に復帰したとしか読めない文章ではなく、チューネンを読んで限界という概念を知ったが、ジェボンズの著書が現われた時、彼から「最終」を借用し、その後次第に「限界」のほうが良いと思うようになったとも読める。しかしこの点に関しては筆者は、断定はしえないが、ハウエイ説にも早坂・橋本両氏の説にも否定的で、むしろケインズ説を支持するほうに傾いている。だが、

③ Cf. 早坂忠, *op. cit.*, pp. 124, 128n~29n. 同じく、橋本昭一, *op. cit.*, pp. 53ff. も参照。

④ ハウエイが「フォン・チューネンは“marginal”にあたるドイツ語を決して使わなかった」(R. S. Howey, *op. cit.*, p. 84)とか、「チューネンは *Grenze* という名詞をたった1回だけ (only once) 使ったが、それは雇い主が労働者をこれ以上雇用しようとはしない“limit”の意味である」(R. S. Howey, “The Origins of Marginalism,” *History of Political Economy*, Vol. 4, Fall 1972, p. 298)と述べているのは意味がわからず、少なくとも読者に誤解を与えやすい。筆者が *Der isolierte Staat* の第2部第1編の本文を大雑把に調べたところ、*Grenze* という名詞が、ハウエイの指摘した1箇所を含めて、少なくとも41回使われている。平均5ページに1回の割合である。その半分強は耕境 (*Grenze der kultivierten Ebene*) や孤立国の境といった意味であり、他には、穀草・三圃農法の限界、人間増加の限度、数学的な極限、利潤・利子あるいは賃金の増減しうる上下限などの意味でも用いられているが、労働や資本を有利に増加しうる限界といった意味での使用が10回ほどある。(Cf. J. H. von

いずれにせよ最初の用語は terminal であったらしい。

ところがウィタカーによると、マーシャルの「初期論稿」中には、限界概念は明らかに存在するが、terminal という用語は全く用いられてはいないのである。⁶⁹⁾ そうすると terminal という用語に関してはハウエイの批判はそれなりの説得力をもってくるといえる。しかしまた、概念が存在するとすれば、マーシャルはその用語を講義で用いていただけかもしれない。マーシャルは講義ではめったに草稿を用いなかったらしいし、彼の講義はノートがとりにくかった

Thünen, *Der isolierte Staat*, Neudruck nach der Ausgabe letzter Hand, 2te Aufl., 1921, SS. 411, 417, 418, 428, 448, 452, 463, 465, 493, 523, 525~27, 531, 533~35, 542, 556, 566, 568, 572, 580, 582, 588). Marginal という形容詞ないし marginal increment にあたるドイツ語はないかもしれないが、これだけ Grenze が多用されておれば、チューネンの基本的思考法に合致する marginal という形容詞ないし marginal increment という用語を思いつくことは十分ありうると思われる。マーシャルは1860年代末から70年代初め頃に執筆されたと推定されている論稿やノートの中で、耕境 (margin of cultivation) という用語を、筆者の知る限りで5回使っている (cf. *EEW.*, Vol. 1, p. 260; Vol. 2, pp. 254, 258). 耕境という用語はミルがチャーマーズからの借用語として用いてからかなり普及したらしいから、マーシャルもミルから得たと解するのが妥当であろう (cf. J. S. Mill, *Principles of Political Economy, Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 3, 1965, p. 697; R. S. Howey, *op. cit.*, pp. 299~300). しかし、チューネンが耕境という意味を越えて Grenze という名詞を多用しているのを見て、マーシャルが耕境という用語と調和する形で、しかもチューネンの思考法と合致する用語として marginal という用語に行きついたということは十分ありうることである。前掲のクラーク宛の手紙や *Principles* 初版ならびに第2版における初版序文のちがいが、marginal という形容詞をチューネンの Grenze という名詞から得たが、marginal という形容詞ないし marginal increment という用語にあたるドイツ語をチューネンが使っているのではないと解すれば理解できるのである。ただ、マーシャルが1870年前後に marginal という用語を用いていた証拠のないのが難点だが、チューネンを読んでからジェボンズを読むまでの時間的間隔が短かくてその証拠が残らず、ジェボンズ書評ではその性格上ジェボンズの使用に従い、その後ジェボンズに敬意を表して彼の用語を用いたために結局その証拠が残らなかったのだと推測することができないだろうか。

⁶⁹⁾ Cf. *EEW.*, Vol. 1, p. 45n.

らしいから余り期待できないが、用語に関しては橋本氏の言われるように当時の学生のノートといった客観的な資料が発掘されない限り、ハウエイの批判がかなりの説得力を持つと言う以上には何も言えない。

しかし、マーシャルが1871年10月以前の段階でどの程度限界効用概念を確立していたかは、「初期論稿」からある程度検討することができる。

「初期価値論」では、彼は既に需要曲線と供給曲線とのいわゆるマーシャル・アーン・クロスを用いて均衡価格を論じているが、需要側の取扱いは極めて簡単である。この論稿の冒頭の2～3ページにおいて、彼はスミスの使用価値と交換価値の逆説から筆を起し、更にバーターに進んで、これらを導入的に扱った後、「買手とは、商品一般に対する支配権と引換えに、ある特定の商品を手に入りたいと望んでいる人である。それを入手するために彼が与えようとするこの支配権の数量は、その商品の彼に対する使用価値を表わす」(EEW, Vol. 1, p. 128)と述べる。次いで、リカードやミルの需要・供給概念に触れてから、「ある期間に、ある市場で、ある特定量の商品が販売されるとすれば、それだけの量が販売されるところの、ある価格が存在するのである」(p. 129)と述べる。ここから直ちに右下りの市場の需要曲線を図示して、「 OM_2 の商品量を分け取る買手達に対するその商品の使用価値は、 M_2P_2 〔限界需要価格〕より小さくはあり得ず、多くの買手達にとっては、それよりもはるかに大きいであ

66 Cf. J. M. Keynes, *op. cit.*, *Memorials*, p. 51.

67 Cf. 橋本昭一, *op. cit.*, p. 58.

68 カニンガムやフォクスウェルが、マーシャルは1870年にジェンキンのものに類似した需要・供給曲線を学生に教えており、ジェンキンの1870年論文をマーシャルが一読して、くやしがつたと述べているが、その証言の正しさの根拠がこの「初期価値論」によって与えられたことになる。それ故にまた、ウィタカーに従って、マーシャルの図形的表現による需給分析は、ジェンキンからの影響を受けていないと考えてよからう。Cf. EEW, Vol. 1, pp. 44~45, 45n, 117n. また、需要側の取扱いの簡単なことは、程度の差こそあれ、*Pure Theory, EI, Principles* についても言えることで、彼の理論は初期から一貫して供給側の分析を中心に組立てられているのである。

ろう」と述べている。(彼はこれらの叙述と平行して供給側の叙述も行つて、供給曲線を図示している)。この取扱いを見ると、ウィタカーの言うように (cf. *EEW.*, Vol. 1, p. 42), マーシャルは右下りの市場の需要曲線を自明のものと考えており、効用極大化から導き出してはいないと言えるようである。

彼が需給の均衡を説き、その際に当然のもの如く右下りの市場の需要曲線を指定するという事は、彼が一方においてリカード、ミルから出発し、他方においてクールノーから出発している限り、ある意味では当然のことである⁽³⁹⁾。しかしまた、彼が限界効用概念に到達していただらしいと解釈できる文言も見られる。「価格 P_2M_2 は、年間 OM_2 量が販売されている時に、その商品を買おうという気になった最後の買手であつて、価格がそれよりも高ければ買おうとはしなかつた者に対する使用価値を表わす」(*EEW.*, Vol. 1, p. 143) という叙述は、限界効用概念の存在を示唆する典型である。

しかしマーシャルはこの論稿において、ウィタカーの言うように、各々の買手は商品 1 単位 (ないしは微少な一定量) を買うか買わないかであると暗黙に想定しているようである。それ故に限界効用概念が最後の買手に対する使用価値として述べられているのである。もしそうでなくて、各買手達が連続的に何単位も購入するのであれば、各々の買手の限界購入分の使用価値 (の貨幣的測定) は価格に等しくなるはずであつて、「多くの買手達にとっては、それより

⁽³⁹⁾ *EEW.*, Vol. 1, pp. 130~31. [] 内は引用者の補足。この叙述はウィタカーの言うように、消費者余剰の萌芽であろう。Cf. *ibid.*, p. 122.

⁽⁴⁰⁾ ミルには需要と供給の方程式という認識があり、彼の叙述は右下りの市場の需要曲線を考へていたことを示している。クールノーは右下りの市場の需要曲線を自明のものと考えて、事実上そこから分析を始めている。マーシャルはこの時期には既にクールノーを読んでいただらしいと推定できる。Cf. J. S. Mill, *op. cit.*, pp. 466~68; A. A. Cournot, *Researches into the Mathematical Principles of the Theory of Wealth*, translated by N. T. Bacon, 1927, pp. 44ff; *EEW.*, Vol. 1, p. 121; Vol. 2, p. 240. 同じく、G. F. Shove, *op. cit.*, pp. 296~301 も参照。

⁽⁴¹⁾ Cf. *EEW.*, Vol. 1, pp. 45~46, 122, 122n.

もはるかに大きいであろう」(EEW., Vol. 1, p. 131)ということにならないであらうし、また、⁽⁴²⁾「ある特定の価格で何人の人が商品を買おうとしようとも、価格が低下すれば、少なくとも同数の人がそれを買おうとするであろう」(p. 145)という叙述が、誤りではないにしても、不満足なものになる。

彼が商品1単位を買うか買わないかという特殊事例を扱っているとすれば、限界効用概念が存在するにしてもまだ不完全なものと言わざるを得ず、個々人の限界効用逓減を論じるわけにはいかないし、それを基礎にして個々人の需要曲線を導き出すわけにもいかない。彼の描くのは市場の需要曲線であり、それは、言わば、商品1単位を買おうとする買手達が各々それに対して支払おうとする価格を、高い者から低い者へと逓降的に並べたものであって、それと関連させられている限界効用概念は、早坂氏の言葉を援用すれば、集計量としての⁽⁴³⁾、ないし社会的な限界効用概念である。これを用いて彼が行なおうとしたのは、使用価値と交換価値との、いわゆるスミスの逆説と(不適切にも)言われているものに一説明を与えることにあったように思われる。しかし彼は恐らくミルの影響によって交換価値が需要と供給との均衡によって決定されるものと考えていたがために、需要価格を使用価値の測度として考え、限界の買手にとっては使用価値(の貨幣的測度)と交換価値とが一致することを論述しながら、それを価値論に仕立てあげることがせず、大部分の買手にとっては使用価値のほうが交換価値よりも大きい⁽⁴⁴⁾ことを示すことによって、その2つの差を消費者余剰概念へと徐々に仕立てあげていったようである。即ち彼の限界効用論

(42) ウィタカーは供給側における同じ困難を救うために、当該個所の使用価値という用語を、各々の売手が販売する数量全体の平均の使用価値と考える別解釈を提出している。Cf. *ibid.*, p. 121n.

(43) 早坂忠, *op. cit.*, p. 164. マーシャルはまだ本稿では効用の個人間比較の問題に触れていない。

(44) ミル等にも交換価値が使用価値以下であるという認識があるが、マーシャルは売手にとっては逆であることを指摘して、更に一步進んでいる。Cf. J. S. Mill, *op. cit.*, pp. 457, 462.

はスミスの逆説から出発して、消費者余剰論へと展開していく過程において形成されたものであり⁽⁴⁵⁾、価値論を形成していく過程においてはなかったように思われる。「初期価値論」において使用価値概念が価値論にとっては何の役割も果していないこと、それにもかかわらず、この論稿がスミスの逆説に対する言及で始まり、需要価格を使用価値の貨幣的測度としてその関係を規定していること、ならびに、使用価値という用語をスミスから得たような形で使用していること等は、そのことを物語っているように思われる。

また一方、「初期貨幣論」に多少注目すべき叙述がある。この論稿は需給の均衡による価格決定の一般理論を貨幣論に適用して、貝殻貨幣を用いて現金残高数量説を展開したものであるが、その冒頭近くで彼は、

「個々人の欲求のタームで表わされた価格を決定する諸原因がここにある。即ち、ある与えられた数量を販売しうる価格は、買おうという気になった最後の人々で、価格がそれ以上に高かったなら買わなかったであろう人々にとっても、それを獲得しようとする欲求が、それと交換に与える財貨を保持しようとする欲求と少なくとも同じ大きさであるような価格である。また、この価格は、売ろうという気になった最後の人々で、価格がこれよりも低かったなら売らなかったであろう人々にとっても、それを保持しようとする欲求が、それと交換に獲得しようとする欲求よりも確かに大きくはないという価格でなければならない」(EEW., Vol. 1, p. 165)

と述べて、更に少し後で、「究極的分析においては人間の意志に基くあらゆる数量の大きさを決定すると知られるはずの利益のバランス」(p. 166)を考え、富をどの程度貨幣形態で、どの程度非貨幣形態で保有するかが「各人が自分自身で調節しなければならない利益のバランスである」(p. 167)と述べている。彼は価格決定の一原因として個々人の欲求に基く主体的行動における利益のバ

(45) この過程において、恐らくリカードの value と riches の区別からも示唆を得ていると思われるが、1870年頃にこの区別が念頭にあったかどうかは明らかでない。Cf. A. Marshall, *Principles*, 9th ed., Vol. 1, p. 814.

ランスということ論じて、あいまいながら、限界効用と価格との比例性を述べるに近いところにまで到達しているのである。

確かに、「初期論稿」において彼が限界効用概念に到達していたことはほとんど疑いえないが、それは上述のように不完全なものであって、個人の効用を基礎として需要曲線を導き出しているとは考えられない。しかし、限界の買手から各買手の限界購入分へと概念を拡充して個人の限界効用逓減を論じるに至るには大した道のりを要しない。

それ故に、「初期価値論」と「初期貨幣論」との叙述を総合して考えれば、限界効用逓減と効用極大化とによって需要曲線を基礎づけるところまではほんの一步であり、マーシャルにとっては何でもないことであつたと思われる。にもかかわらずそれを行っていないのは、彼が価値論の基礎としての限界効用概念には重きを置いていなかったことを示しているように思われる。その理由は次のような点にあるのではないかと筆者は思う。(1)ジェボンズ等は効用が価格を決定するという主張に重点を置いたのに対し、マーシャルは、効用は価格を決定する需要と供給という2つの基本的要因の一方を規制するものにすぎないと考え、むしろ古典派に沿って供給側の要因に重点を置いたこと。(2)従って、クールノー等によって経験法則として自明のもののように考えられていた市場の需要曲線を明示しさえすれば、その心理的基礎にまで深く入りこむ必要を感じず、一層重要と考えられた供給側の分析ならびに価値と分配との統一的把握に主力を注いだこと。(3)恐らくはスミスの逆説を説明するために、使用価値ないし効用を測定するという問題には留意したが、上記の理由によって効用が需要ないし価格を規制するという点には余り留意しなかったこと。(4)前掲(脚注13)のように彼は、限界効用概念がインプリシットにはミルにあると考えていたので、それ故にジェボンズほど革命的なものとは考えず、また、革命的なものに仕立てあげようとはしなかったこと。

彼が供給側を重視するのは、均衡価格が最大の経費のかかる部分の生産費を

償う価格であるとして、結局ミルと同様に生産費說的立場をとることからもうかがえるし、「初期価値論」約38ページのうち需要側を扱っているのが3ページならずであり、他にも需要に言及した箇所は散見されるものの、残りの大半の30ページ以上が供給側の取扱いにあてられていることからもうかがえる。しかも取扱われているものは4期間区分に基く期間分析 (*Principles* においては3期間区分である)、収穫逓増下の供給曲線、均衡の安定性と多重性、結合需要と結合供給に基く一般均衡論的分析など、*Principles* でおなじみのものである。彼は既にこの時期から *Principles* で中心的な位置を占めているこれらの問題を大きく取り上げているのである。

限界効用概念にマーシャルが付与した重要性、及び、経済学に対する彼の問題意識がジェボンズとかなり異なることは、彼のジェボンズ書評にもうかがえる。ジェボンズは快楽と苦痛という個々人の心理的・内面的動機を基礎にして効用から価値を説明し、それによって古典派に代る新しい経済学を樹立しようとした。それ故に、彼の *Theory* は快楽と苦痛の理論ならびにそれを基礎とした効用、交換、労働の理論に大半のスペースをとっているのである。それに対してマーシャルの書評はむしろそれ以外の点に向けられている。しかも効用理論への言及も今まで考察してきたような彼の基本線に沿ったものである。我々は次の点に留意したい。外国貿易の便益評価には、最終効用と総効用との双方

(46) Cf. *EEW.*, Vol. 1, pp. 136, 138, 147, 165~66.

(47) これについては、たとえば、上宮正一郎、「ジェボンズの『経済学』建設」(神戸大学)『国民経済雑誌』第137巻第2号、昭和53年2月、pp. 67~85を参照。

(48) この書評は1872年4月1日の *Academy* 誌に掲載されたもので、*Memorials* に収録されている。以下本段落中のページ数のみのものは *Memorials* のページである。ジェボンズはこれを読んでも、たいして注目しなかった模様である。Cf. Jevons' letter to J. d'Aulnis dated 7 July 1874, R. D. C. Black ed., *op. cit.*, Vol. 4, Letter No. 389, p. 61. なお、我々はこの書評が署名入であったことを *EEW.*, Vol. 1, p. 100n によって知っているが、それまではケインズの「ジェボンズが *Academy* 誌の書評の著者に気付いていたという証拠は何もない」(“William Stanley Jevons,” *Essays in Biography, Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. 10, p. 133) という叙述のために無署名だとかなり誤解されたようである。

に注意を払わねばならないとジェボンズが認識している点を彼が評価していること (cf. p. 95)。リカードの価値論とジェボンズの価値論の「2組の理論の差異は非常に重要ではあるが、主として形式上の差異」(p. 93) であり、財貨の効用は一部分はそれを獲得する困難に依存しているから「労働が価値の一原因である」(EEW., Vol. 1, p. 127n) と主張していること (cf. p. 93)。「……そして〔ジェボンズ〕曰く『労働者の賃金は、彼の生産したものから地代、租税及び資本利子を差引いたものに結局は一致する』と。……この引算をするには完全な価値論を持たねばならないことを彼は見ていない。彼は賃金額及び生産物の交換価値が可変的要素であって、その一方の変化が他方の変化に影響を与えることを述べていない」(p. 94, [] 内は引用者の補足) と論じて、価値と分配の統一的把握を主張していること。経済諸量の相互依存関係を強調すると同時に、部分分析法の意義を評価しており、当時既にほぼ完成していた一般均衡分析的骨格を部分分析的に肉付けしようとしているような発言を行っていること (cf. pp. 94~95)。

これらを見る時に、マーシャルが後年に記している、ジェボンズの *Theory* が彼の困難に何の助力も与えてくれなかったという言葉、ならびにその書評には彼の分配理論の核心が含まれているという言葉の意味が理解できる。彼はジェボンズとちがって効用が価値の一原因としか考えなかったが故に、それをもって価値論に仕立てあげようとはせず、相互依存関係の認識に基いて価値と分配の統一的把握をめざし、一般均衡分析的骨格を部分分析的に肉付けしようと苦闘していたのである。

以上の考察によって、terminal という用語の問題は別にして、マーシャルはジェボンズの *Theory* の公刊以前に、既に不完全ながらも限界効用概念をもっており、それは古典派とクールノーを研究する中から形成されたものだと言ってよかろう。また、その概念の用い方もジェボンズとは大きく異なっているの

(49) Cf. *Memorials*, pp. 99~100.

である。従って、こういった限定された意味ではジェボンズからの影響はないと言ってさしつかえなからう。しかしそれをもって直ちに、ジェボンズからの影響は全くないと言うことはできない。不完全な限界効用概念を仕上げていく過程におけるジェボンズからの影響といった可能性を排除できないからである（この点については筆者はむしろチューネンの影響だと考えたいが）。また、1876年頃からマーシャルが徐々に限界効用理論を需要の基礎論に仕立てていく過程ではジェボンズからの影響を否定することはできないようである。

また、前掲のワルラス宛の手紙に見られる、多くの点でジェボンズよりも先を進んでいたということも、多くの点というのを経済学体系全体との関連でとらえれば、（問題意識にちがいがあにせよ）認めねばならないであろう。しかし、それを限界効用理論だけとの関連でとらえれば、若干懐疑的にならざるを得ない。マーシャルの限界効用概念がまだ不完全なこと、彼がもともとそれを用いて展開しようとしたと思われる消費者余剰論が、まだ萌芽の状態に止まっていること、更には、限界効用概念に付した重要度ないし経済学体系に占めるその位置のちが⁶⁰い等を考えれば、限界効用理論としてはジェボンズに一日の長があるように思われる。

かくして、マーシャルが独立して限界効用概念を発見したということはほぼ認められるが、限界革命と一般に言われるものを限界効用革命としてとらえれば、（少なくとも1870年代前半の）マーシャルはその推進者であったとは言えないであろう。しかしそれを限界革命としてとらえた場合には、また話は別である。

以上の結果は、早坂説が大筋においてほぼ支持されることを示している。ハウエイ説は、細部においては注目すべき点も多いが、決定的な論点においては支持できないと言わざるを得ない。

60 ジェボンズが過度に限界効用概念を重要視したという意味ではマーシャルが劣っていたわけではないが、その概念を用いる姿勢においてジェボンズに一步譲るであろう。

さて、「初期論稿」においてマーシャルが既に限界効用概念を保持していたとすれば、それに対するチューネンの影響はどうか、限界概念をチューネンから受継いだというのはどういう意味か、という問題が残る。前述のように、ウィタカーによれば「初期論稿」にはチューネンの影響は見られないのであって、チューネンを読んでチューネン流のアプローチに転換するのは1870年か71年と考えられるからである。これに関して筆者は次の点に留意したい。チューネンの生産費と使用価値との均衡⁵¹⁾という考え方は、マーシャルの「初期論稿」と調和すること。それ故に、チューネンの基本的考え方から出てくる限界増分という概念が重要であると同時に、マーシャルの当時の不完全な効用概念の彫琢にもその概念が役立つこと。クルノーの数理的手法や費用関数の微分係数⁵²⁾（即ち限界費用）重視がチューネンと調和すること。これらを見るに、マーシャルはチューネンから特に代替原理と限界増分という概念を摂取してクルノーの数理的分析と結びつけ、それを需要論ないし効用論にも用いて、それによって、当面の問題に関しては、当時保持していた不完全な限界効用概念を仕上げた消費者余剰論を萌芽の状態から進展せしめたのだと筆者は考えているが、確証はない。

チューネンからの影響は、その著書の性格上、限界生産力説のほうに一層かわりが深いと考えられる。ここで目を転じて、マーシャルの限界生産力説の生成過程の検討に向おう。 (未完)

51) Cf. J. H. von Thünen, a. a. O., SS. 530, 531.

52) Cf. A. A. Cournot, *op. cit.*, p. 59.

53) これについては次節で触れる。